

論文要旨

所属ゼミ	高木晴夫研究会	学籍番号	80228861	氏名	松田 浩治
(論文題名)					
<h3>組織合併のカオスと闇 — 事実は小説より奇なり —</h3>					
(内容の要旨)					
<p>本研究では、企業合併の組織統合に関する理論的背景と、合併の実態との間に乖離が生じる点に注目し、実地調査をベースに研究を展開した。</p> <p>2003年4月16日、アメリカ商務省連邦取引委員会より合併の許可を得た世界第1位の製薬企業であるPfizer Inc.と第10位のPharmacia Corp.との間で現在進む合併事例を取り上げ、調査を実施した。特に日本市場において、2003年8月1日の合併に向けて組織統合を推し進めてきた両社の日本法人、ファイザー株式会社（ファイザー）とファルマシア株式会社（ファルマシア）の組織統合の過程において、両者の組織間には、どのような現象が起き、統合のシステムはどのように変遷し、収束に向かうのかなどについての詳しい実地調査を行った。</p> <p>ファイザーとファルマシアの組織統合の過程は、一般的な経験則から考慮した場合、平均8年の期間を要することなどから、本研究は時間的制約を受けるため、仮説構築、一般化のための理論研究を組織融合が終了する将来の課題とし、修士論文研究の目的としては、フィールドワーク、アクションリサーチ、事例調査のみを調査することとして取り組んだ。加えて、企業人として、大型企業同士の合併を内部から観察する機会というもの、そうそう恵まれるものではない。今、現実に進められている自社の組織統合を一般化された理論で追うのではなく、実地調査ベースでのアクションリサーチを行うことで、ファイザーが近々から将来に向かって行う組織統合の方向性、組織“融合”への可能性を探り、その変遷を追うことで、自身が自社に復職した際、実際の組織統合をマネジメントする立場として、この調査を活用できるものとしたと考えてきた。</p> <p>両社の合併プロセスにおいては、当初想定していなかった問題、つまり合併の理論やモデルといわれるものと、実際の企業内部における合併の様相には大きな剥離があることが顕在化し、多数の問題が発現した。これは、合併理論によって構築される「合併のシナリオ」というものが、時間軸を伴わないものであることに加え、様々な要因の相互作用が考慮されていないことに原因があると考察した。また、実際に合併プロセスを進め、組織統合、そして異なる2つの組織を融合へと導くためには、合併の中で起こる種々の問題に臨機応変に対応できる柔軟性の高い社内体制を構築し、長期的にこのシステムを保つことであると考えた。更にこの体制を組織が融合を果たすまでの長い期間、絶えず刷新しながら維持することが重要であると考察した。</p>					